

中学生に対する ソーシャルスキル教育が仲間受容に及ぼす効果

江 村 理 奈

The Effect of Classroom-based Social Skills Education on Peer Acceptance for Junior High School Students

Rina EMURA

本研究では、中学校2年生を対象にクラスを単位としたソーシャルスキル教育を実施し、ソーシャルスキルの促進と仲間への好意性に及ぼす効果を検討した。その結果、ソーシャルスキル教育の指導群は、指導を行わない統制群に比べて「社会的働きかけスキル」が上昇し、仲間からの好意性得点も上昇した。これらの結果から、中学生に対するソーシャルスキル教育が、クラス内の好意性を高め、仲間受容の促進に効果をもたらすことが示唆された。

問題と目的

いじめによる自殺や不登校、引きこもりなどが社会問題として深刻化している。特に中学校での学校不適応の問題が顕著であり、文部科学省（2007）の報告によると、平成18年度において不登校の児童・生徒は、小学校では302人に1人の割合であるのに対し、中学校になると35人に1人の割合へと急増している。不登校の原因として挙げられる理由として、最も多いものが友人関係であり（現代教育研究会，2001）、中学生にとって友人関係は、学校適応において非常に重要な要因であると考えられる。

良好な友人関係を築くために必要な要素のひとつとしてソーシャルスキル（社会的スキル：social skills）が挙げられる。ソーシャルスキルとは、Combs & Slaby（1977）によれば、「社会的に受け入れられているか、あるいは社会的に価値ありとみられているやり方で、社会的場面において、本人にも、相手にも利益になるように相互作用する能力」と定義されており、対人関係を形成し、維持するのに必要な技術である。ソーシャルスキルは、幼児期から他者との相互作用の中で学習され、人との関わりを通して発達していく。しかし、現代の子どもたちは、少子化や習い事等の多忙さの中で、きょうだいや仲間との遊びや相互作用を通してソーシャルスキルを習得する機会に恵まれなくなっている。こうした現代の社会状況を踏まえて、最近では、ソーシャルスキルを学校で教えるソーシャルスキル教育（social skills education）が盛んに行われ始めている。

特に、小学校でのソーシャルスキル教育の取り組みが数多く報告されている。たとえば、金山・後藤・佐藤（2000）は、小学校3年生を対象に、孤独感を低減することを目的に8セッションから

成る集団社会的スキル訓練を行い、訓練群の方が統制群よりもソーシャルスキルが上昇し、孤独感が低下したことを報告している。また、伊佐・勝倉（2000）は、小学校5年生を対象にソーシャルスキル教育を行い、ソーシャルスキルの促進とストレス反応の低下を報告している。

一方、学校不適応が深刻化する中学生を対象としたソーシャルスキル教育は、小学生と比較すると少ない現状にある。数少ない中学校での実践研究をあげると、渡邊・山本（2003）、江村・岡安（2003）などがあげられる。渡邊・山本（2003）は、中学校1年生を対象とした4セッションから成るソーシャルスキル訓練を実施している。その結果、訓練群が統制群に比べてソーシャルスキルが上昇し、訓練前にソーシャルスキル得点の高かった生徒は、「社会場面への不安」得点が低下したことを報告している。また、江村・岡安（2003）では、中学校1年生を対象に8セッションから成るソーシャルスキル教育を行っている。この研究では、指導前から指導後にかけて、ソーシャルスキルの上昇した生徒は、孤独感の低減がみられたことを報告している。

Ladd&Asher（1985）によれば、ソーシャルスキル教育の本来の目的は、集団社会的スキル訓練の促進だけでなく、仲間関係のつまずきから派生する社会的適応の問題を改善することであるといわれている。しかしながら、仲間関係の改善に関しては、小学校2年生を対象として集団社会的スキル訓練を実施した後藤・佐藤・佐藤（2000）の研究以外に報告されていない。そこで、本研究は、仲間関係が改善しにくいといわれる中学生を対象にソーシャルスキル教育を行い、仲間受容に及ぼす効果を検討する。

方 法

参加者

公立中学校2年生2クラスの生徒56名（男子26名、女子30名）をソーシャルスキル教育の指導群とし、他の1クラスの生徒29名（男子10名、女子19名）を統制群とした。

測定尺度

ソーシャルスキル教育の効果をみるために指導前と指導後に以下の測度を使用して指導効果の測定を行った。以下の調査はクラス担任に依頼し、クラス単位で実施された。

（1）ソーシャルスキル尺度

渡邊・佐藤・岡安（2002）が作成した子ども用社会的スキル尺度を使用した。この尺度は、小学5年生から中学生までを対象としており、仲間強化（10項目）、規律性（6項目）、社会的働きかけ（3項目）、先生との関係（3項目）、葛藤解決（4項目）、主張性（3項目）の6下位尺度、29項目から成っている。各項目に対して、4段階（全然そうしない＝1；あまりそうしない＝2；ときどきそうする＝3；いつもそうする＝4）で自己評定を求めた。

（2）仲間による好意性指名

それぞれの生徒が仲間から好意的な評価を受けているか査定するために、PEI（Pupil Evaluation

Inventory: Pekarik et al.,1976) から好意性 (likability) に関わる3項目 (親切な人, たくさんの人に好かれている人, みんなのことを考えてくれる人) を使用した。PEIは, 好意性, 攻撃性, 引っ込み思案の3つの因子からなる35項目の行動特徴を参加者に示し, その特徴に最も当てはまるクラスメイトを指名させる手続きを用いている。指名人数を指定するが多いが, 本研究では, ソーシャルスキル教育に参加した生徒が, それぞれのクラスメイトをポジティブに評価するようになるかどうかを明らかにすることを目的として, この尺度を使用するため, 採用された項目はすべて好意性に属する項目とした。さらに, ソーシャルスキル教育を受けて, 仲間同士が好意的に評価しあうようになれば, 指名される生徒の数が増えると予想されたので, 本研究では, それぞれに当てはまると思う生徒の名前を人数制限なしで指名させた。そして, 指名された数 (被指名数) を各参加者の好意性得点とした。

標的スキルの選定

生徒の実態と学校生活を送る上での必要性を考慮して, 担任・副担任教師との話し合いの結果, ①あたたかい言葉かけ, ②上手な断り方, ③気持ちのコントロールの3つを本研究での標的スキルとした。全3回の授業について各回の標的スキル, ねらいをTable 1に示す。

Table 1 各回のソーシャルスキル教育のねらい

回数	標的スキル	ね ら い
1	あたたかい言葉かけ	自分の発する言葉が, 相手にどのような影響を与えるかに気づき, あたたかい言葉かけとは何かを知り, 状況に応じた言葉かけができるようにする。
2	上手な断り方	相手との対等なよりよい関係を形成するために, 要求に応じられないときや応じたくないことには適切に断る方法を学習する。
3	気持ちのコントロール	自分がどんなことにイライラしているかに気づき, 感情的に行動する前に, 気持ちを静めて解決策を考えることで, 感情をコントロールする方法を学習する。

ソーシャルスキル教育実施準備

副担任教師が授業者となるため, ソーシャルスキル教育の実施前に, ソーシャルスキル教育についての研修を実施した。研修は, 心理学を専門とする大学院生が担当し, 次の5つの内容について説明した。①ソーシャルスキルを使用することの意義について, ②モデリング, ③行動リハーサル, ④フィードバック及び社会的強化の具体的な実施方法について, ⑤日常生活でのソーシャルスキルの使用を促す具体的な方法について。さらに, ソーシャルスキル教育の授業を実施する前後には, 担当教師と大学院生が協議し, 指導案や留意点などについて検討した。なお, 3回のソーシャルスキル教育に関する指導案は, 大学院生が草案を作成し, その後, 関係教師と話し合い共同で作成した。特に, 授業の実践方法については, 十分な共通理解が得られるまで討議を行った。

ソーシャルスキル教育の実施方法

実施期間は、X年2月から3月の約1ヶ月間であった。1セッション50分から成り、1週間に1回のペースで全3回実施された。副担任教師が授業者となって、各クラスの担任教師とのチームティーチングの方式で授業を行った。毎回の授業は、以下の6つの要素から構成されていた。①適切なソーシャルスキルを用いることの重要性についての説明、②問題となる場面の提示、③登場人物の行動についての説明、④適切なソーシャルスキルのモデリング、⑤クラスメイトとの役割を交代しながら実施する行動リハーサルとフィードバック及び社会的強化、⑥日常生活でのソーシャルスキルの使用の奨励の6つの要素から構成されていた。これらは、コーチング法に基づいて行われた先行研究（たとえば、金山ら、2000）とほぼ同一の要素であった。

結 果

ソーシャルスキルの分析

Table 2は、指導前後のソーシャルスキル総得点と下位尺度得点を示したものである。指導効果の検討にあたっては、ソーシャルスキル尺度総得点と各下位尺度得点について、それぞれ2(群)×2(時期)の分散分析を行った。その結果、「社会的働きかけスキル」において、交互作用($F(1,83)=2.99, p<.10$)に有意な傾向がみられ、下位検定の結果、指導群が、指導前から指導後にかけて得点を上昇させていた。ソーシャルスキル総得点と他の下位尺度得点については、有意な交互作用は認められなかった。

Table 2 ソーシャルスキル教育前後のソーシャルスキル得点

()内はSD

	指導群		統制群	
	指導前	指導後	指導前	指導後
ソーシャルスキル総得点	84.32 (11.21)	85.73 (11.96)	88.14 (5.78)	88.17 (5.49)
仲間強化スキル	31.64 (5.13)	32.48 (5.18)	33.72 (4.37)	33.52 (4.53)
規律性スキル	18.68 (2.56)	18.30 (2.87)	18.41 (3.39)	18.52 (3.40)
社会的働きかけスキル	8.39 (2.00)	8.86 (1.95)	9.31 (1.49)	9.10 (1.78)
葛藤解決スキル	10.12 (2.27)	10.55 (2.30)	11.41 (2.84)	11.31 (2.77)
先生との関係スキル	7.11 (1.84)	7.21 (2.36)	6.90 (2.04)	7.07 (2.39)
主張性スキル	8.38 (1.85)	8.32 (1.91)	8.38 (1.80)	8.66 (2.06)

仲間受容の分析

Table 3 は、仲間受容の指標として用いた好意性尺度の指導前と指導後の得点を示したものである。指導前から指導後にかけての好意性得点の変化をみるために、好意性尺度得点について2(群)×2(時期)の分散分析を行った。その結果、時期($F(1,83)=4.24, p<.05$)の主効果と交互作用($F(1,83)=39.45, p<.001$)が有意であった。下位検定を行った結果、指導群は、指導前から指導後にかけて、有意に得点が増加していた。統制群は、指導前から指導後にかけて有意に得点が低下していた。

Table 3 ソーシャルスキル教育前後の好意性得点

()内はSD

	指導群		統制群	
	指導前	指導後	指導前	指導後
好意性得点	12.73 (10.01)	15.06 (8.83)	15.62 (5.78)	11.07 (5.49)

考 察

本研究では、中学2年生を対象にソーシャルスキル教育による仲間受容へ及ぼす効果を検討した。その結果、ソーシャルスキル教育を受けたクラスは、受けなかったクラスに比べて、仲間受容の指標として用いた仲間からの好意性の得点が上昇していた。この結果は、小学校2年生を対象として、集団社会的スキル訓練を行い、好意性への検討を行った後藤ら(2000)の研究と同様の結果であった。そのため、仲間関係が改善しにくいと言われる中学生に対するソーシャルスキル教育も仲間受容の促進への効果をもたらすことが示唆された。

しかしながら、本研究では、ソーシャルスキル促進の効果として統計的に統制群よりも増加がみられたスキルは「社会的働きかけスキル」のみであった。そのため、好意性得点の上昇には、社会的働きかけスキルが寄与している可能性が高いと考えられる。またさらに、ソーシャルスキルの習得だけでなく、ソーシャルスキル教育の授業の中で、フィードバックの要素である「お互いのよいところをみつけてほめる」という要素が、クラス内の好意性を高めることに関連していたとも考えられる。今後は、ソーシャルスキル教育と仲間受容について、どのような要因が影響しているのかを明らかにするためにフォローアップ査定や注目統制群の設定などを考慮して、さらなる検討をしていきたい。

引用文献

- Combs, M. L., & Slaby, D. A. (1977). Social skills training with children. In B. B. Lahey & A. E. Kazdin (Eds.), *Advances in clinical child psychology*, Vol.1. New York: Plenum Press.

- 江村理奈・岡安孝弘 (2003). 中学校における集団社会的スキル教育の実践的研究 教育心理学研究, 51, 339-350.
- 現代教育研究会 (代表: 森田洋司) (2001). 不登校に関する実態調査—平成5年度不登校生徒追跡調査報告書, 文部科学省委託調査研究
- 後藤吉道・佐藤正二・佐藤容子 (2000). 児童に対する集団社会的スキル訓練 行動療法研究 26, 15-23.
- 伊佐貢一・勝倉孝治 (2000). クラスワイド社会的スキル訓練が児童の学校ストレス軽減に及ぼす影響 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 51.
- 金山元春・後藤吉道・佐藤正二 (2000). 児童の孤独感低減に及ぼす集団社会的スキル訓練の効果 行動療法研究, 26, 83-95.
- Ladd, G.W. & Asher, S.R. (1985) Social skills training and children's peer relations. In L.L. Abate & M.A. Milan(Eds) *Handbook of social skills training and research*. New York: John Wiley .Pp.219-244.
- 文部科学省 (2007). 平成18年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査
- Pekarik,E.G.,Prinz,R.J.,Liebert,D.E.,Weintraub,S.,& Neale,J.M. (1976). The Pupil Evaluation Inventory: A sociometric technique 1977 for assessing children's social behavior. *journal of Abnormal Child Psychology*, 83-97.
- 渡邊朋子・岡安孝弘・佐藤正二 (2002). 子ども用社会的スキル尺度作成の試み(1) 日本カウンセリング学会第35回大会発表論文集, 93.
- 渡辺弥生・山本弘一 (2003). 中学生における社会的スキルおよび自尊心に及ぼすソーシャルスキルトレーニングの効果—中学校および適応指導教室での実践— カウンセリング研究, 36, 195-205.